



# 大佛次郎集

新潮日本文学

25



© Jiro Osaragi, Printed in Japan 1972

口絵写真 朝日新聞社提供  
乱丁・落丁本は本社又はお買求めの  
書店にてお取替えいたします。

定価 800円

大佛次郎集 新潮日本文学25

昭和四十七年十月三十日 印刷  
昭和四十七年十一月十二日 発行

著者 大佛次郎  
発行者 佐藤亮一  
発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 東京(〇三)二二二一  
振替 東京八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社  
製本 新宿・加藤製本所  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
扉・見返・カバー用紙 特種製紙株式会社  
表紙クロス 日本クロス  
工業株式会社 函用紙 日清紡績株式会社  
製函 文京紙器株式会社

目次

乞食大将

帰郷

\*

霧笛

ドレフユス事件

詩人

地霊

解説

年譜

藤田  
圭雄

5

138

333

415

506

519

585

597



大佛次郎集



## 乞食大将

### 槍

手負いとなり戦場に置き去りに、気を失っていた若い武士があった。

正月のことだったので、日が暮れかけて寒くなつて来たのと傷が痛んだせいで我れに復つて目をあけた。目の前の山の尾根に光沢のない冬の入日が色だけ朱色に沈もうとしているのを、まだ、はつきりとした意識はなく見まもつて、驚く心が急に湧いて来たように、目ばかり大きく見ひらいて行った。

そこは崖がけの下の笹の繁つた斜面だった。少し前まで、戦鬨はこの崖の上の狭い道路を挟んで行われたので、また、そこで人の声がしていた。これは敵方の者である。

山に挟まれてゐる谷の入口の方角にも、遠く多勢の人間のどよめきが聞えていた。夕霧の湧いて来た山に、勝どき

の声が轟とどろいた。その人数は高声に話しながら、こちらへ引揚げて来る。小笹の中に横たわつていた手負いの武士は、これは崖の上から覗き込まれたら見つけられるのだと気がついて、もとのまま身動きもしないでいた。

この場合、悪いことには、この若者は黒色の立派な鎧よろいを着込んでいた。崖から落ちた時も放さなかつたと見え、長柄の槍を手につかんだままでいた。もつと暗くなつていれば、崖の上から覗き込まれても見つかるとは、日が沈んだばかりのところだったので、危険なことだった。若者は、敵の話声が近くなつて来るのを聞いていたが、不意と目を大きく開いて、そのまま閉じずにいることにした。

大胆なことだが、こうしている方が、敵のすることが見えて、いざと云う場合にも都合が好い。また目を剝いたまま死んでいる人間があつたところで、決して珍しくないものである。頭の上の崖からは、何の木か枯れた枝をひろげていて、その一本の枝の股またに、敵か味方か、腹巻をつけた雑兵の死体が一つ、腰を折り手足を垂れて落ちずに振下つていた。はめている手甲てがまが黄いろい布か革で、あたりが蕭条とした枯木立の山のせいにか、変に派手な色に見える。風の加減かゆらゆら、これが揺れているように見える。

崖の上を引揚げて行く敵の姿は枯草の上に、ちらと見えたり隠れたりした。戦に勝つて帰るのだから、話声が大きい。谷を覗き込んで、髻こむぎ面を見せて、音を高く唾つばをして行った者もあつた。



仰向けに小笹の中に横たわったまま、若者は剛胆に目をあいて、それを見ている。話声や足音だけとなり人が隠れると、山の上にひろがっている夕空の色が見えた。これは日のある位置に近い部分はまだ光で白く濁っているが、それを離れて東に寄るほど青い色が濃く、冷たく澄み渡っている。その透明に青い中に星が一つ嵌め込んであるのを若者は認めた。ちかちかと、見ている間に、その、何ともいえぬ白い光が、次第に明るく煌めき出して来るのである。

星は、目を刺すようにきれいに光っていた。きれい過ぎて気になるくらいである。それから空が深く青い。沈んだ美しい色をたえて、この上なく静かな冬の夕空である。

暗くなつてから敵の眼をくぐつて味方の陣地へ帰る。これは極り切つたことで、若者が身動きもしないで横たわったまま一心に考えているのは、別のことだった。

（そうだ、今夜、夜討を掛ければ、必ず、敵を存分にひっかき廻せるぞ）

血まみれに成っている顔に、若い眼が急にいきいきと輝いた。

「これだけ味方がひどくやられたのだと、奴ら、もう、これで今日は済んだと考え込んで気を抜いている。そこへ突込むのだ。是非、そうしなければならぬ。あいつ等の、のんきな話を聞いて見ろ」

気を失つてから、一体どのくらい、時が経つたのか？ 背後に伏兵を受けた上に、正面からは木戸を開いて押し出

て来た敵が、一団となって殺到して来た勢いは、まったく面も向けられぬ凄まじいもので、踏み止っていた自分もいつの間にか揉み込まれ、泳がせられて、左右からの槍に突立てられ、最早これまでと観念して敵の軀と重なり合つて揉んでいる間に、深傷に気を失つたのか、また足を踏み外して崖を墜ちて失神したのか、ともあれ歯が立たぬような憂目を見せられた。

「あいつ等が！」

騒々しく笑つて誰か崖の上を通つて行く。数人の足音である。傷の痛みに若者は危く呻くところだった。

どこと、どこをやられたのか？

動けるか？

立てるか？

動いては敵に発見されることでまたそれを確かめる自由はない。

傷は燃えるように痛み出したがそれと一緒に凝り固まっている軀が焼け出したように、心を追立てて来たのが、そのことである。再び起つてあの凄まじい敵に戦を挑むことである。

「今夜だー」

この城井谷の宇都宮の一族、鎌倉に頼朝がいた頃から八代、この土地に根を据えた家柄で嶮岨な要害を恃んで、一步も降ろうとはせぬのを、味方は繰返して攻め掛けてはその度毎に幾度も苦い目を見て追落される小頼さ！ それ

を叩き潰す。微塵に、ひっつき廻して見せる、今夜だ。今夜を除いてその機会は、また何時、つかみ得るか？

「俺は一体、起てるのか？」

身にえぐり込むような問である。また、それには何とも返答が出来なかった。若者は蒼茫と暮れて来る空を身動きもせずに見詰めているだけだったが、色のない唇から呟いた。

「何と云っても、これが戦の面白いところだ、やりたい。やってみたい。軀は動かんでも、何とか……」

出血が夥しかったせいで、うとうとと夢を見ているような心持でいたが、気がついて見ると、溪谷は闇にとざされて、山に挟まれた空は星を一面に鑲めてあった。

若者はそれまで忘れていたことを急に思い出したように、「そうか」

と、口走って小笹の中に起きなおった。

星あかりか、杖に突いた槍の穂に白い光が水のように走った。苦痛をこらえながら、若者は崖の上の道路の様子を偵つて置いて、静かに歩き出した。

夜の谷は、寂寞としたものだった。

「動けるぞ。いや、どうしても、今夜の内に出なおして来なけりやならぬ」

足もとに、躓くくらいに敵味方の戦死体が転がっていた。しかし、黒々とした山は静かだ。これは、敵がまったたく、防備を怠っていると云うことなのだ。この事実、衰えて

いる気力を振り立たせて、一念太く、若者は取りついていた。

「やるのだ！ 是が非でもそうせんけりやならぬ。時をおいて出直すのでは、昼間のことを繰返すだけだ」

笹に滑って、足を取られて仰向に転がったが、唇を噛んで、痛みに耐え、また、槍を杖にして身を起した。その後の努力は、まったく人間ばなれがしていた。鎧を着た重い軀を搬んで、足場の悪い斜面を漕ぎ、茨を分けて、徐に谷の出口の方へ歩いて出て来た。そうしている間にも、夕方まで彼我が闘った崖の上の道には、赤く松明を燃やして坂を登って行く人間があった。これは道路に出るのはまだ危険だと云うことなのである。

若者は、それを見て、行く方角を決めているのである。

半刻ばかり経ってから、山間の小さい部落のあった平地に出た。部落の家と云う家は、敵が火を放って焼き払ってあったので、焼け跡に、燃え残った柱が、不揃いに骨のように立っているばかりである。いるかと思われた敵は、そこにはいなかった。遅く山の上に出て来た月が片側に光を投げて、そのあたりにも残っている死屍を見せた。その少し先の道端に、納屋らしい小屋が、なかば焼落ちて屋根を地に伏せていた。

その前を通り過ぎようとしかけてから、若者の足は、はたと停った。杖にしていた槍を倒して、緩慢な動作で位取りながら、敵と思われた人影を凝と睨み据えて立ち止った。

火花の出そうな強い目の色だったが、思いがけず、穏やかな声が喉から押上って来た。

「何じゃ？」

その言葉とともに、若者は槍を起して抱くようにして、再び杖にして身を支えた。崩れ落ちていた屋根の蔭にいた人間は、犬の子のように呻きながら、おろおろして出て来た。

「旦那さまか。旦那さまか」

「馬蔵」

と、若者は、声を荒く叱りつけた。

「何を吠える！」

「御無事で御座って、御無事で……」

「吠えおるわ」

と、若者は、苦笑いして、きつと、別の方角へ目を向けたが、

「そう、たやすくは命まで失くならぬものと見ゆる。が……人が見えるぞ」

下僕は、そう云われてから、川下の方角から近寄って来る松明の火を見て、遽かに、はつとしたらしく狼狽えて、

「敵で御座ります。誰も彼も」

「見られてはならぬ」

こう云い棄てて若者は自分から、近い山の裾にある杉の林の方へ、不自由な軀で歩き出しながら、落着いた声であつた。

「おれの首を拾うつもりで、出て来おったか」

後を追って来た下僕は、恐怖のあまり返事もなかった。

おろおろとして走って主より先に出ようとしている。平然と口をきいているのは、主の若者だけである。これは、松明をかざして来る敵が、まだ声の聞えぬ距離にいと確信しているのである。

「えらい目に遭うたなあ」

「……………」

「肩に大きく風窓をあげられた。骨に風があたっておるわ。そんなことは知らんで、気を失って、のうのうと寝ておつた！」

はは……と低く笑って、

「が、結構、生きておる。動ける」

「お声が……」

「雑兵めらじゃ。俺の槍を、ともに受ける根性もあれば見上げたものぞ。敵の大將宇都宮中務少輔とあらば、こは滅多に背は見せられぬ。手負いの負目はあつても、武士の冥加に、必ず出て槍はつけるぞ」

中務少輔鎮房は城井谷の城主、身の丈六尺あまりの魁偉な体格に恵まれている上に臂力絶倫と知られた。――

松明の群は道路に現われた。焼跡に月光の煙っている場所を、火の子をあたりに散らしながら現われて、話声も一こちらに聞き取れた。

「今日のような日に、男のお子なれば……二倍三倍に目出

度いのじゃがのう」

「うや、慾を申すな。女のお子じゃとて、これは目出度  
さ」

鎮房と見える巨人は見当らぬ。隠れていた若者は、こう  
見とどけた。その後、この話を聞いて、聴耳を立てた。

昼間、城井谷へ攻め掛けて逆に手きびしく追落された黒  
田長政の軍勢は、ずっと後方の平地に退いてから混乱を収  
拾して陣を立て直している内に夜と成った。

この苦い経験は初めてのものではない。幾度か攻め込ん  
で失敗を繰返して来たが、城井谷に扼する宇都宮勢は、要害  
に成っている谷を出て平地で闘えば不利の戦と成るので決  
して長追いはして来ない。それだけに攻めるのにも厄介な  
敵なのだが、黒田勢も平地に後退すれば、傷兵を手あてし  
て、疲労を休めることが出来た。陣を布いている小さい村  
の人口には、篝火を焚いて歩哨を配置し、軍の主力は民家  
に分散して休息を取らせるようにした。

それにしても今度こそは攻落して見せると意気込んで掛  
つただけに、その日の敗北は暗澹としたものだった。所々  
に焚火が燃え出して、家の荒壁や立木の下枝が赤く照らし  
出されるように成ってからも、手負の者が苦痛に呻き、無  
事で引揚げて来た兵も話す気力もなく疲労して、地に腰を  
おろしたまま動かずにいた。

引揚げに遅れた味方が、その間にも三々五々と村道を戻

つて来るのが見えるが、道端の空地や軒下に腰をおろして  
いる者は、茫漠とした目を放って、他人事のように無気力  
に見送っているだけである。味方が受けた損害がどの程度  
のものか、まだ判っていないかった。とにかく、えらいこと  
だった。これが、生き残った全部の人間の心を重くしてい  
る感銘なのである。そうしている間に、焚火の火の色だけ  
を残して、あたりの闇は、とっぷりと深く濃く成って来て  
いた。まだ風の冷たい正月の夜なのである。

総大将の吉兵衛長政は、本陣に成っている民家へ入って  
いた。鎧も解かず炉端に大胡坐をかいて、まだ二十歳の血  
気の大將で、戦場に立つ毎に家来をおしのけて敵の前へ出  
ずにはいられない向い気の気性が、粗朶火で煙っている若  
い顔に、苦り切ったものと成って現われていて、附添って  
いる部將たちが慰めようとしても受附けぬのである。

やりおった、と、軽くは、長政は口を開けなかった。父  
親の如水が、城井谷は遠巻きにして城方が弱るのを辛抱強  
く待つより手段はないといったのを、長政は強襲を掛けて  
一気に抜く計画だったのである。それが、今日の無慙な敗  
戦と成って現われた。利かぬ気の若者に、これは、まぎら  
し切れぬ打撃であった。黙りこくって不機嫌に、炉に燃え  
る焰の踊を見ていると、部將の一人が土間で話している声  
が聞えた。

「うむ。……又兵衛どののをのう」

(又兵衛……)

と、きつと目を上げかけて、話の様子から長政は事情を察して動かなかつた。

又兵衛と云つたのは、後藤又兵衛基次もとごとうであつた。これが、引揚げて来た味方の中にいないと云うのである。

炉端にいる長政は、避けようとしていて、又兵衛基次の精悍な顔附や、烈しい口のきき方を思い泛ふかべた。これは基次が臣下ながら、年齢が僅か向うが上の若者で、長政とは初陣以来、どの戦場へ出ても欠かさず肩を並べて闘つて来た関係もある。いや、この場合には、もっと、なま新しい記憶があつて、その事件を長政は思い出して来たのである。

我れに復つたように、長政は、部将の一人に声を掛けた。  
「又兵衛を、死なせてか」

答えた者も無造作であつた。

「その仕合せのようで御座る」

長政は、敗れて生き残るより討死した者の幸福を思つて、舌打が出そうな感情であつた。むつとした顔附は、炉の火に向つて動かなかつた。手だけが動いて枯枝を取つては音を立ててへし折つて、焔の中へくべ初めた。

この城井谷攻めの最初の一戦に長政は今日よりも惨めに打破られて、姿もなく城に帰つてから父の如水に向けて面目なく鬢を切り、配下の者が皆これに倣つて一せいに引籠つたことがあつた。

父親も、その処置をよしとしたらしく、呼び出しもしなすゝる。

ところが、長政の部下から唯一人だけ鬢もおろさず、月代を剃つて、毎日平気で城へ出ていた男がある。これが余人ではなく又兵衛基次であつた。

城の者が長政に対する遠慮から、見兼ねてこれを詰つて、お手前も鬢を払つて謹慎する方が為ではないかと意見した。すると、基次は、却つて何故そうせねばならぬか、と問い返す。意見した方は、啞然として、膝を詰め寄つて声高いい出した。

「若殿さま敗軍の責を負い、鬢を払つて御引籠りあらせられ、下々皆これに倣い慎みおるに、お手前のみ一向何気ないような態で歩き廻られるとは、世間が如何ように申すかじゃ」

基次は、これを聞き了ると、顔色も動かさずに言返した。  
「負ける度に頭を剃りますか。負けることもあり勝つこともあるのが軍の定法。今負けたらば重ねて勝つように工夫致すが当然と思うが負ける毎に髪をおろしておつては髪を伸びる暇も一代御座るまい。珍妙なことを承る。お互いに勝ち負けあつての戦、二度や三度の敗軍に一々気を腐らせるようで、凡そ戦が出来るかどうかじゃ」

血気の間人だけに声は高かつた。しかし基次が何も他人に異を立て、理窟で云い負かそうと気負うているのでないことは、純朴な態度に見えていた。基次は、心からそう信じているので、人に詰られて心外と思つたらしいのである。正直に頭固に、そうする方が当然と信じ切つていたので、

長政だけでなく自分の朋輩とも離れて、一人だけ髻も落さず謹慎もしないで来たのである。

その心持が、平然と動揺なく顔に現われていたので、意見を持出した方が、

「それは、如何にも左様かも知れぬが……」  
と云つたまま、言葉の継穂がなくなつて拙いこととなつた。

長政の父親が、その話を奥で聞いていて、  
「小僧が！」  
と、云つて苦笑いした。

長政以下には、遊んでおらんで出て来い、城井谷をどう攻めるかじゃ、と沙汰があつた。一同は初めて、敗戦の責任を除かれたわけなのである。

城井谷の攻略にも新しくかかることになり、長政の旗本には、以前どおり基次が加わつていた。それが重ねて今日の失敗となり基次は討死したらしいと話に出たのである。基次のような剛の者まで死なせたと云うのは、改めてこの日の戦がどんなものだったかを、繰返して考えさせられることなのである。くべる粗朶を手を失くして長政は、腕を組んで黙然と炉に坐つていた。結論はない。明日改めて強襲を掛ける。それだけは頭で決つていて、そう云い出すのさえ腹が立つのである。

不意と、人の声がして門口から誰か土間へ入つて来た。槍を重く地に突く音を聞いて、長政は目を上げ、今の話の

又兵衛基次が、生きて顔に血を流して突立っているのを見た。

長政の方から声を掛けるだけの暇もなく、基次は一礼して、上櫃へ近寄つて、腰をおろして、

「殿」  
と鋭く呼んだ。基次の、血を流している顔には、明るい色が泛び上つていた。何か胸の中に楽しいことがあつて、それを云い出すのに、もどかしくて舌にもつれているような工合であつた。

「夜討をお掛けなされ。今夜こそ……。今夜の敵は油断を致しておりますぞ。確と、又兵衛が、この目で見とどけてまいつた。是非、是非とも、左様になさねばならぬ」

何を云う？ と啞然とした様子で、土間にいた部将たちは顔を寄せた。

長政もまた、炉端から、光る眼で見据えていて、  
「手負いが！ 何を……吐きく！」

「いや。八幡！」

と基次は、明るく叫び返した。

「この機を逃すことは相成らぬ。追いかぶせて夜討を掛ければ、出城の一つや二つ、きつと明け方までに我がものと成る！」

若い目、鼻、口。その全部が、強力に、一步も枉げまいとする意志を示している。決断のない心の状態にいた長政から見れば、これは、眩しいように感じられた。長政は、

黙然としたまま加勢を求めるように、土間に集まっていた旗本の人々に視線を向けた。それと見て、基次は、向きを変えて同じく、彼らを見た。

睨むようにして、その目は強いものだった。

「御決断。……今夜を見送っては、懲りずに、永代、同じことを繰返すことになる。太兵衛どの、如何じゃ」

部下にこれから改めて押し出して行く戦意はないと見て、長政は、笑って言葉を遮った。

「利かぬ気の奴が！……。汝、その深傷で動けるか」

「御下知次第じゃ」

と、更に強く、はね返って来た。

「大将が動けと仰せらるれば、又兵衛は、動く。いやこのお供はきつと仕る。動くなと仰せられても、動いて見せ申す」

「剛情者……」

笑いそらそうとした笑いが、長政の顔から、ふいと消え去った。昨年しんねんの十月の戦に敗れて面目なきに髻を払った折まげの、この基次一人が身勝手に反抗するようにして平然と、事もなげなげにしている、武士の器量は一度や二度の敗戦に狼狽ろばいえぬもの、負けるのも戦いくさじやと嘯うそくように云ったと云う、長政としては甚だ手痛たはなかった記憶が、鈍い胃痛のようように胸に拡がって来ていた。

遽たちまちかに気難かしく黙り込んだまま、長政は粗朶をつかみ寄せ、手荒く折っては火に投じ始めた。

基次は、返事を待っていたのだ。

「殿！」

「ならぬ」

と長政は答えた。

「明日、改めてのことにしよう。汝も、傷の手当せよ」

「いや、明日では既に……」

「誰も疲れている。手負も多い……」

「あいや、それは！」

「去ね！」

基次には極端に不機嫌できびしかった長政は、土間にいる部将たちぶしょうに、いたわるような瞳を向けた。あるいは彼の同意を求めた、と云ってもよい穏やかな視線であった。

「この上の、無理はならぬてや」

基次は、瞳を放さず長政を見詰めていた。そのまま、ひき退る男ではなく、どこまでも喰い下って来ると云った見詰め方である。

冷淡れんたうにしているように見せて、長政が、激して来たのは、そのせいであった。これは自分の初陣以来、苦勞を共にして来たといえ家来けらいなのだ。臣下おんげがこう不躰ふていに、不遜ふそんに主人を見る法はないと思うから、腹に据えかねて来るのである。長政もまた、血気の大將であった。

「無理と仰せられますが、勝つと目算動かぬ戦をば、お捨てなさるか。なるほど、味方は疲れておれど……」

「ええい、又兵衛……」

「いや」

と、烈しさは、一分と譲らなかつた。

「御下知一つで、動かぬものが動く。これが大将の御器量。先手は、手負いの又兵衛が仕る。……あたら軍の汐時を……

……、五体無事の面々を控えておつて……押切られい。大将の御覚悟一つあつて、人も動き申す」

「又兵衛、俺れに、器量なしというか」

「御器量あれば、たつて申す」

長政の面に、さつと朱が差した。これまでよりも、もっと強い言葉、険悪な声が出るものと期待されて、土間にいた母里太兵衛が、

「又兵衛」

基次は姿勢も変えぬのである。これ以上の強弁は、無礼をかどに斬つて捨てるといふ羽目さえ考えさせる不安なものがあった。人が、それで動いたのである。

「無礼ぞ。又兵衛」

「断わるまでではない、俺れは今夜、これから死んで惜しゅうないと思うた。その代りには、戦をこちらのものにすると思うた」

「やあ、やあ、そりゃ明日のことではなからう。また大して派手に怪我をして来たものじゃ」

「今の内に傷を洗うておけ」

「よいわ、よいわ、去ぬるわ」

引立てられるように立ち上つた。やはり槍を杖にしてい

るので、そうせぬと歩くのにさえ困難らしいのが、

「その軀で」

と、思わず、不憫を覚えるとともに、負けじ魂に微笑をそそられた。

「歩けるか？」

「何の！」

と、基次は云い放つた。

「人間が、まだ、くたばりはせぬ、生きておるのじゃ」

その姿が戸口から外へ出て行つたのを見て、取合わぬと見えていた長政の固く結んだ唇から、

「彼奴！」

と云う言葉が漏れた。主従の遠慮はなく、人間と人間とが我慢の限まで行つて、初めて出るような性質の声であった。それを、誰よりも先に、長政は自分から意識して、すぐと苦い笑いにまぎらした。

「根性骨よ」

その刹那に、土間にいた者たちに、或る衝動が渡つた。

人の注意は戸口の外に向つた。そこで誰か馬から降りた気配があつたが、平服の、小柄な男が、無造作な調子で入つて来たのである。土間にいた者が耳に留めた声は、人違いではなかつた。この頬骨の出た、太い眉だけが黒々とした中年の男は、長政の父親で、勘解由孝高であった。太閤の片腕と見られていながら、太閤から「何とも心を許し難し」と蔭で云われていた謀将で、中津の城の主である。部将た



ちは、一せいに土間に膝を突いて迎えるのを、愛想なくじろりと見廻してから、脚が不自由なので、かなり醜く跛足を曳きながら、長政が空けた炉端に来て、小さく、きちっと坐った。

くぼんで光る目は、即座に、長政に向った。そのまま暫く物もいわず、両手をひらいて、炉の火にかざしていたが、「はは……えらく、また、しぼんでおるのう」

長政が、弁明しようとする孝高は笑って、かぶせるようにいい出した。

「見た。見たよ。外の模様はな。が、本陣は別のことと思つて来た。しつかりせい。通夜も、もう少しは陽気なもののように。戦に負けるものに負けつぷりがあつてな。これは見上げたと思うのがあるさ。はははははは……酒でも出して振舞つてやりなさい。時に、誰が城井谷の絵図を持つている。ちよと、見せな」

中津の城にいる人が、何を思い立つてか急に馬を走らせて出て来た。それだけで部将たちには、響くものがあるのだ。一人が絵図をひろげると、孝高は膝の向きを変えてこれに向つて、老眼鏡を掛けて覗き込んだ。

「うむ、神楽山というか？」

ひとり語のように聞えた。が、急に、槌を落すような調子で指を、絵図の上のその地点に垂直に置くと、

「吉兵衛」

と、長政のことである。

「今夜の内に直出して行って、この出丸だけ貰つておけ」はつと、人が動いた。

「わけなからう。これほど、一同ががっかりするように負け戦の後にはな、敵にも油断があるものじゃ。やつて見るさ」

誰も、一語も発しなかった。絵図の上に孝高が立てた太い指は、そのまま暫く動かずにいて、この微妙な、押しつけるような屋内の沈黙を凝集していたかの感じがある。厚い眼鏡越しに、孝高の瞳は絵図の上をなお窺うようにしておのれが下した決断に確証を求めていた。頭上に在る梁の上を、こまかく鼠が走る音がした。人は、全部沈黙を支えていた。

「それで、よし」

と、孝高は云い放つた。これも、先ずおのれに納得を求めたというような語気であつたが、顔を上げて長政を見た。「どうじゃ？」

土間にいる部将たちの黙り込み方には、この瞬間が来るのを憚り怖れていたような趣がある。孝高のいうところは、実に、たった今、後藤又兵衛が頭なりに主張して主人に拒まれて立去つたばかりのところなのである。もとより偶然の符合であろう。孝高が見せた態度は、又兵衛の意見を聞いて来たと言ふべきものではない。

若い主人は、ここで前に確信を以て云い切つた言葉を一変させるか？ 父親に逆らつてそのまま押しとおすか？